

戦国期のお金に関するこぼれ話

千葉県行政書士会 葛南支部 小浦 泰之

(はじめに)

戦国時代は貫高制から石高制に移行する時期で、資料により武将の所領を表す単位が貫高だったり石高だったりします。

そもそも一貫とは石高にするとどのくらいの価値があったのか？という疑問から今回の原稿を執筆することにしました。歴史書にある単位に関する記述から、それが現在でどのくらいの価値があるのかを考察してみます。

(1) 1貫=何石？

まず基本的に、「貫」とは本来は大量の銭を携帯するために銭を束ねた道具「錢貫」のことで、銅銭1,000枚を一まとめにすることが一般的で、1貫=1,000文という価値基準が定着します。銭を貫くから「貫」となったわけです。

一方「石」は米の取れ高を表す単位です。1石は1,000合と同量で、概ね成人男性が1日に食する米の量が3合だったといわれているので、1石は成人男性が食べる米の量の約1年分となるわけです。

鎌倉～室町時代の田地の面積は、その田で収穫することのできる平均の米の量を通貨に換算し「貫」を単位として表されました。これを貫高といい、それを税収の基準にする土地制度を貫高制といいました。

貫高制では土地の面積や大まかな質によって年貢高が定められ、実際の収穫高とはほとんど無関係でした。当時の日本は貨幣を自給できなかったため、貫高制を維持する十分な貨幣量を確保できず、経済が混乱したため、豊臣秀吉による太閤検地で知行高は実際に収穫される米の容積とされ、石高制へと移行していきます。

そもそも1貫は何石にあたるのかといっても、地域やその年の米の取れ高によって価値が変わるため、一概には言えないのですが、全国平均で1貫=2石といったところが妥当なラインであったようなので、ここでは便宜上**1貫=2石**というレートで話を進めていきます。

そして、1石は現在の貨幣価値でいくらになるのか？前述のとおり、1石=1,000合ですから、1合で約150gの米の量だと計算すると、1石=150kgの米となります。現在販売されているお米の値段はそれこそまちまちですが、大体10kgで3,000円～5,000円といった価格帯が妥当な値段かと思えます。ここでは、10kg 4,000円として計算し、**1石=6万円**とします。

となると**1貫=12万円**となります。この金額を元にして、戦国期の様々なお金に関するエピソードを紐解いていきたいと思えます。

(2) 豊臣秀吉の家出の際の餞別はいくら？

『太閤記』には、養父の竹阿弥と折り合いが悪くなった秀吉が、家出をする話が描かれており、その際に母からもらった餞別が錢1貫文との記述があります。

1貫=12万円ですので、**家出の餞別は12万円**だったこととなります。

自分の再婚により養父に虐待され、家にいられなくなった息子の家出の際に渡す金額としては若干少ないか？とも思いますが、貧しい農家の女房であった母のなかが用意できる精一杯の金額だったことでしょう。子を思う母の気持ちが表れているように思います。

(3) 今川義元の首の値段？

1560年の桶狭間の戦いは、織田信長が飛躍する第一歩となる戦いでした。その重要な戦いで一番の手柄は、実際に今川義元の首級を挙げた毛利新介良勝ではなく、梁田出羽守正綱だったとする記述が『三河後風土記』にあります。これは、梁田正綱が義元本陣の場所を信長に通報し、その情報で合戦に勝利できたことによるとされています。

情報を何より重要視する信長の先見性を表すエピソードとして語られますが、この梁田一番手柄説はほかの同時代の資料には記述がなく、真偽の程は定かではありません。

ちなみに『太閤記』にはその恩賞として3,000貫文の知行と、沓掛城を与えられたとの記述があります。**3000貫=3億6千万円**と考えると、かなりな恩賞額ですね。もっとも、敵の大將を討ち取った一番の手柄と考えると、妥当な恩賞かもしれません。

(4) 信長が堺に要求したとんでもない金額

『信長公記』によると、信長が上洛を果たし、畿内の三好三人衆と戦っている最中、会合衆が支配していた堺に対して矢銭2万貫を要求します。

2万貫=24億円!とんでもない金額を要求された堺は要求を断固拒否、三好三人衆に援軍を頼み抵抗しますが、三人衆が敢え無く敗退すると要求を拒みきれず、矢銭の支払いに応じます。

かなりな無理難題のようではありますが、当時の鉄砲の一大生産地かつ経済の中心地であった堺の経済力を考えれば、これくらい安いものだったかもしれません。

信長はこの後、今井宗久を通じて堺の直轄領化を推し進めて、会合衆の影響力を完全に排除します。

(5) 内裏の修理費

奈良興福寺の僧、多聞院英俊が書き残した『多聞院日記』によると、信長の父織田信秀が内裏の壁の修理費として4,000貫を寄進したとの記述があります。

4,000貫=4億8,000万円とすると、天皇のお住まいを直すには安いかなと考えますが、当時の人件費は驚くほど安かったようなので、これくらいの金額でこと足りたことでしょう。

(6) 素浪人山本勘助の就職

『甲陽軍鑑』には、家督を継いだばかりの武田晴信が、今川家に食客として寄宿していた山本勘助を、禄 100 貫で召し抱えた話が出てきます。

100 貫 = 1,200 万円とは、何の実績もない無職の素浪人に支払う額としては破格ですね。それだけ晴信は勘助の能力を買っていたとの見方もできますが、もちろん山本勘助の活躍は史実とはいいたい部分が多く、この話も資料的価値が低いとされる『甲陽軍鑑』にしか出てきません。

ただ近年、『甲陽軍鑑』の資料的価値について見直す動きも出てきており、案外本当に伝説の軍師山本勘助の活躍と、その能力に目を付けた武田晴信の慧眼が証明されることがあるかもしれません。

(7) 戦国時代の魚の値段

後北条氏の領民に対する課役を定めた『小田原衆所領役帳』によると、北条家に納める魚の価格が決められており、鰯 2 匹 = 1 文、大あじ = 2 文、鯉 = 12 文、鯛 (50 cm) = 30 文と細かく買い取り価格が決められています。

1 貫 = 1,000 文ですので、1 文の価値は約 120 円となります。

とすると、鰯 1 匹 = 60 円、大あじ = 240 円、鯉 = 1,440 円、鯛 = 3,600 円となります。こうしてみると現在の価値よりは若干安くなるのかな？と思いますが、何せ領主への上納品ですので、安く買い叩かれていたのかもしれません。

(8) 戦国期の芸能人の地方巡業

戦国時代の公家である山科言継 (やましなときつぐ) が記した日記『言継卿記』によると、言継が同じく公家の飛鳥井雅綱とともに尾張の織田信秀に招かれ、1 ヶ月ほど蹴鞠の技を伝授したとの記述があります。

その際に飛鳥井雅綱は尾張の国人領主たちから、30 貫の謝礼を受け取ったとの記載があるので、30 貫 = 360 万円が当時の芸能人の地方巡業手当ということになります。

1 ヶ月で 360 万円なら、当時経済的に逼迫していた京都の公家にしてみたら、これほどおいしい仕事はなかったのではないのでしょうか。

(9) 天文学的な茶器の値段

ルイス・フロイスの『日本史』によると、足利義満が所有していたとされる、名器「九十九髪茄子」の値段について「3 万クルサードほど」と記述しています。

1 クルサード = 300 文ほどでしたので、3 万クルサード = 1 万貫 = 12 億円の価値ということになります。

いくら足利義満が所有していた名器とは言え、この天文学的な値段は想像を超えています。当時の武将の茶器に対する執着が垣間見えますね。

(10) 村を略奪から守るにはいくら必要？

戦国時代、戦乱が起きると、攻め込んだ兵士たちは村々で人や物を奪い、乱暴狼藉を尽くすのが常でした。それをなくすには、攻め込んだ勢力にお金を払い、狼藉をしてはならないとの「制札」を書いてもらうことが必要でした。天正18年(1590)、豊臣秀吉が関東に攻め込んだとき、秀吉は「制札」の値段を次のように決めました。

大きい村=3,200文 中くらいの村=2,000文 小さい村=1,000文

つまり、略奪されなくなかったら村の規模によって **12万円~38万円の上納金**を支払えということですね。略奪をされて村を滅茶苦茶にされることを考えたら、随分安いものだと思います。

尤も、略奪禁止のお触書を書いてもらうだけの値段なので、実際に略奪行為が行われなかったとはいえないかもしれません。

(おまけ) 江戸幕府の予算規模

江戸幕府の直轄地である天領は、時代により変遷がありますが、勝海舟が記した『吹塵録』によると幕末で約400万石ありました。

400万石=2,400億円と考えると、やはりかなりの予算規模ですね。

ただ、400万石すべてが幕府の収入になるわけではなく、天領だと四公六民だといわれていますので約160万石=**960億円の年貢収入**があったと考えられます。

そのほか初期の頃は鉱山収入や長崎での貿易の収入などもあり、かなり潤沢な予算編成が可能だったようですが、度重なる江戸の大火や鉱山収入の減少により、幕府財政は火の車となっていきます。

そんな中、大奥の運営費は年間20万両=120億円というとんでもない額が計上されていました。大奥の女中の年収が、上席の者で200両=1,200万円ありました。さらに各大名からの賄賂も加えると、年収1億円ほどになる女中もいました。そのお金で長屋を経営し、さらに私腹を肥やしていたそうです。それだけ大奥は力を持っていた権力集団だといえると思います。

気になっていた戦国時代のお金の事情を調べ直して、自分でも新しい発見があり、歴史の楽しさにまた触れることができました。

最後までご覧いただきありがとうございました。

(参考文献)

「日本史総覧 中世二」(新人物往来社)

「日本史総覧 戦国」(新人物往来社)

「雑兵たちの戦場」藤木久志(朝日新聞社)

「貨幣の地域史」鈴木公雄編(岩波書店)

「日本史資料-2-中世」歴史学研究会編(岩波書店)

「日本中世都市の世界」網野善彦(ちくま学芸文庫)

千葉県行政書士会

小浦 泰之

<https://kourajimusyo.com/>